

# 釜ヶ崎今昔考

(その三)

## 大正時代の釜ヶ崎

明治四五年七月は蒸し暑い日が続いていた。まだ六一才であった明治天皇は、一カ月足らずの御病気で三〇日に崩御された。御病気が発表になった二〇日に、東株市場は恐慌相場に陥り、市民は二重橋の袂に密集して御回復を祈った。とに角明治は終り、カチューシャの唄と、さすらいの唄で大正の幕が開いた。この大正は、明治から昭和へのかけ橋とも言える。明治は長くしんどい時代であった。人々は一種の虚脱感と同時に解放感も味わった。大正は何となく気軽な感じの年号であったが、この期に『長町から釜ヶ崎』という移動が完成する。

一体スラムは都市の場末に発生し、都市膨張の波瀾化を繰り返して

押されてゆく。大阪南のスラムは、まさに此を証明するものである。旧市域からガードを潜った所にある飛田・釜ヶ崎は、そんな自然条件が全て備っていたと言えよう。大阪市が近代的大都市として発展するにつれて、スラム(都市下層社会)も肥大しつつ、都心から外郊へと移動する。明治期に見られた窮民・細民と呼ばれた人達は世間から疎外され、疎まれ、爪弾きされても、しぶとく生き続けやがて近代のスラムとしての地位を確立して行った。この期に於ける優れた報告・研究書としては、村島掃之の『ドン底生活』、八濱徳三郎の『下層社会研究』があげられよう。

### 一、木賃宿と貧民長屋

大正五年大阪府知事は大久保利武、市長は池上四郎である。大阪市人口は一、五〇八、六七七人、一三二七、八三九世帯であった。この頃、飛田という名で慣用される界限で、ドン底生活を営んでいる者が多いのは小字飛田、その東南の電光社長屋、紀州街道の面側の小字釜ヶ崎である。つまり関西線ガードを抜けてから紀州街道の東西およそ四一五町である。この飛田界限の特色として、毎日新聞記者、村島掃之は次の四点をあげている。即ち(1)言わぬ者等不具者が多い。(2)乞食が多

多いといふ。それは市内で言葉が許されぬ木質宿が、飛田に五〇軒近くもあつて、常に貧客を迎える準備が出来ているからである。ガード附近は先頃の立ち場であり、色街・神社仏閣が多いので、必然的に乞食も多い。木質宿は食事を出さないから、いきおい附近には多数の飲食店が林立するわけで、釜ヶ崎一帯には数百軒の店が三千人余の木質宿宿泊者を相手に張られている。関西線ガードの南、釜ヶ崎巡査派出所に至る紀州街道に於ける調査によると、三町程の間に約八〇軒の飲食店がある。外に木質宿一六軒・はり屋・風呂屋・質屋等がある。飲食店の中にはホルモン屋もあり、夕方に重い足を引きずつて帰つて来た通路、伝法坊主があられもなく、餓鬼の如く貧り食うのである。一合四銭のドロクに陶然となつているニセ坊主もいる。又この辺の名物は『淫売』であり、四四軒の木質宿に二九〇名の密淫売婦がおり、彼女達下等売春婦の極は、チヨンノマで一〇〇三〇銭程度で、安宿生活の女や附近貧民窟の娘が内職としていた。当時の木質宿は収容人員一〇〇名というのも多く、階下は二層仕切りの家族用貸切り部屋とし、一日一五〇二〇銭取つていた。二階には単身者用の大部屋を設け七〇一〇銭である。一日七銭は月に換算して二円一〇銭で、これは一軒の家が借りられる金額であつた。しかし一軒の家を持つと、蒲

団・釜・釜し必要で、近所づき合ひも必要となり、この為つ木質宿での長逗留となる。この点、同じ貧民窟でも長屋と木質宿では大きな差がある。即ち長屋は一応我が家であり、生活の根拠であるが、木質宿は仮住いで気楽である。少し時代は降るが、釜ヶ崎木質宿に於ける子供の事情をよく伝えるものとして、大阪市立児童相談所所員、鶴川氏の『木質宿宿泊児童の調査』があり、又四年一〇月から一月にかけて貧民窟に潜入して、その詳細を『救済研究』(四年八月二七日創刊)に、山崎源泉氏が発表している。この外、貧民長屋に住む夫婦者でありながら、三食共自炊しない女、当時の言葉を借りると『カマドを持たぬ女』がいた。彼女達は三食共に、箒と破れ鍋を持って残飯屋の冷い土間に立つ女でもある。即ち玉造の二軒茶屋を東へ、泥塗を歩いて行くと東成郡中本町の小さな平屋が残飯屋である。二坪余の土間にバケツを置き、中には冷え切つた人參の片がまじつて、之に杓が突込んであり、又土間には四斗樽が二つあり、中にはバラバラの麦飯がつまつてゐる。顔の蒼い三〇才程の女が来て四斗樽から残飯をしゃくり上げて、ボタリボタリと箒に入れて、それに残飯の中より選びした四人分の漬物が五厘、一家四人で二〇銭余りで十分の量である。この残飯屋の仕入先は歩兵第三七連隊と輜重兵第四連隊である。一日六〇貫余の

残飯業者を引き取つてくる。貧民大伴一〇〇銭であり、その分量は米の一升三〇四合であつた。

## 二、新聞記者の探訪報告

六年二月一七日付で林市蔵が大阪府知事に就任、市長は池上四郎である。この頃より、貧民街及び貧民教育に関する新聞記事と、記者による探訪報告が増える。その代表的なものが六年六月より大阪毎日新聞に連載した村島婦之のものである。今一つは大阪朝日新聞に『大阪の特殊学校(徳風・有隣・心華・愛染・累徳・鳴尾学舎)』を連載した馬公生である。期せずして大阪の二大新聞が貧民探訪に関して張り合う事になるわけである。六年大阪府警察部調査によると、市内極貧者は二、五四四戸、九、五一八人とあり、この他郡部にも同数程度が存在していたと言われる。更に同年一二月難波警察署調査による貧民統計では、夕日橋派出所管内(広田・関谷町)一四八戸、新宅(長町以東日本橋東一丁目)四七戸、西関谷町三一戸、日本橋筋東一丁目二二戸、西浜一三三戸、北島町一二二戸、木津崎町八一戸、三島七八戸、今津三一戸の計六九二戸とある。次に前記村島記者が難波警察署の貧民専従巡査に伴われて、夕日橋を渡つて広田町貧民窟を探訪しているの

民窟のある家に入っていく。それは家とは名のみで障子の襖はあっても、その上に貼られた紙片は見えず、四畳程の広さで当然ある四枚の畳は二枚しか見えず、ドス黒い床板があらわに見える。見るからにへドの出そうな蒲団が二枚つくねられて、一人の女がその上に座っている。この家では一〇才の子供が稼いでくる工賃二〇銭が生活費である。どうしても支払ねばならぬ一日六銭の貸蒲団料、三銭の家賃(二カ月一円)を差引けば残金一一銭。これが親子五人の口糊料となる。その上祖父の薬代も三日に一回必要だという。彼等の喰へるお粥は『米粒の煎じ汁です』と案内の村上専従巡査は、こともなげに言い切っている。

### 三、米騒動と釜ヶ崎

七年八月の米騒動は、ついに九月三日寺内正毅内閣を辞職に追い込んだ。大阪も諸物価はもとより米価の騰貴は天井知らずで、一般労働者の日収・賃銀は、それについて行かず大衆は苦しい生活を余儀なくされていく。

一方大阪市では、米騒動以前の四月、我が国最初の試みとして『市設市場』四ヶ所(天王寺・谷町・境川・福島)を半年間の予定で開設している。これが八月の米騒動の際、十二分に効果を発揮した事は言うまでもなく、やが

て後の公設市場となり、十四年三月には市内

にその数二三を数えるに至る。七年大阪市内の米価騰貴状態はといえば、七月一日一五銭、二八日三〇銭、八月一日三六銭、五日四二銭、六日四三銭、七日四四銭、八日四五銭、九日四八銭、一〇日五〇銭、一日五七銭、一二日五八銭という狂気米価となつている。この原因の一つはシベリア出兵であり、米騒動に揺れ動く国内状況を省みず、出兵を断行した結果、消費した戦費一〇億圓(ウード一杯四銭)、戦死者三千人といわれるが、その犠牲が全くの浪費に終っている。八月三日ついに富山県下で、米の県外移出に反対する漁村の女房達によって惹起された『越中女一揆』は、米騒動に発展したから急速に全国へ伝播して行く。大阪市に於いても八月一〇日今宮スラムの木賃宿住人二、七〇〇人が頼りとして居る飯屋が休業してしまう。その頃今宮の飯屋で、一杯五銭の大盛飯が、八銭・一〇銭・二〇銭と値上げされた結果が休業である。翌一日午後七時頃、飯屋休業の為夕食の取れない大勢の女達が、今宮の『天正』という米屋前に、手に手に箆を持って集まってくる。この店で米の大安売が行われるという噂を聞いて来たが、天正米店では時価五七銭の白米を特に五二銭五厘にするという。しかし女房達は納得せず『ヤツツケロ』の大声と共に看板を外し、雨戸を壊わし大騒ぎにな

る。翌一日午後七時頃、飯屋休業の為夕食の取れない大勢の女達が、今宮の『天正』という米屋前に、手に手に箆を持って集まってくる。この店で米の大安売が行われるという噂を聞いて来たが、天正米店では時価五七銭の白米を特に五二銭五厘にするという。しかし女房達は納得せず『ヤツツケロ』の大声と共に看板を外し、雨戸を壊わし大騒ぎにな

る。翌一日午後七時頃、飯屋休業の為夕食の取れない大勢の女達が、今宮の『天正』という米屋前に、手に手に箆を持って集まってくる。この店で米の大安売が行われるという噂を聞いて来たが、天正米店では時価五七銭の白米を特に五二銭五厘にするという。しかし女房達は納得せず『ヤツツケロ』の大声と共に看板を外し、雨戸を壊わし大騒ぎにな

宿・貧民長屋の住人達は男女・子供・老人を問わず現場に押しかけ、不穏な状況になつた。結果、天正米店では五二銭五厘、四〇銭と三〇銭と二五銭にまでさせられ、後は喚声を挙げる女房達によって、警察官監視のもとに箆・バケツ・風呂敷を持ち込んで、店内の米を洗いざらい買い込んでしまう。更にこの群集は口々に『米を売れ、二五銭以上では買わぬ!!』とわめきながら、群をなして暗い大阪の街を南へそして西へと移動を開始しはじめる。以上が大阪における米騒動の発端である。当時大阪朝日新聞記者として、実際にこの騒動の取材に当たった藤原昌美氏は、此の凄惨な出来事を余す事なく記事にしている。大阪での米騒動参加者は、府下各地で二三万二千人が蜂起し、その直後住友・藤田・久原の財閥が各々二〇万円を提供し、拠出金一五〇万円を以て外米及朝鮮米約一〇万石を購入し、廉売した。又米騒動に先立つ六月六日、今宮新家の大阪自衛館(元大阪府警察保安課長、中村三徳館長)は、南区日本橋東一丁目

に、林市蔵知事が名付親となり『簡易食堂』を開設している。一食一〇銭で、食べ放題であった為その人気は大変なものであった。この頃釜ヶ崎の木賃宿は四五軒、三千人で、貧民達の平均日収四八銭、市内の指定下宿・労働下宿は、月一円二八銭、一円三五銭程度で

る。翌一日午後七時頃、飯屋休業の為夕食の取れない大勢の女達が、今宮の『天正』という米屋前に、手に手に箆を持って集まってくる。この店で米の大安売が行われるという噂を聞いて来たが、天正米店では時価五七銭の白米を特に五二銭五厘にするという。しかし女房達は納得せず『ヤツツケロ』の大声と共に看板を外し、雨戸を壊わし大騒ぎにな

らしい、米騒動直後の九月二日西区幸町に『市立簡易食堂』を開設し、一食一〇銭均一とし、引き続き九月五日には天王寺に開設している。

#### 四、ドン底生活者

九年二月三日林市蔵知事が離任し、同日付で池松時和知事が就任。市長は池上四郎で、市初代社会部長には、天野時三郎が就任。当時の木賃宿・貧民長屋を詳しく報告したものに、井上貞蔵の『貧民窟と少数同胞』があり、その中で井上は下寺町・日本橋・広田町・今宮・木津・釜ヶ崎・西浜・北島の各町を代表的貧民窟としている。特に下寺町・広田町では通称『八〇軒裏・新八〇軒裏・蜘蛛の巣裏・蜂の巣裏・爛的裏・残飯裏・坊主裏・庄の裏』等大小二〇余の貧民窟があった。同年の戎警察署調査によると九七五世帯一、五六一戸一六、一一八人（男子三、二八〇、女子二、八三八）とあり、長屋の家賃は一日一八〜二一銭が相場であった。彼等はアンモニアの臭気のある井戸水を平気で飲み、屑拾いの車に乗せられた幼な子は、親が他人の物を盗るのを見乍ら育って行く。又同年一〇月釜ヶ崎巡査派出所が管内の有職者二、一五一人を対象に、職業調査を行なっている。この管内における木賃宿は、紀州街道二丁目あたりに集中し『御泊り宿』と大書し

一夜一五銭とか、千客萬来とか書いた街灯が並んでいた。この頃の日稼人足、人夫達は早朝四時に木賃宿・安宿・貧民窟を出発し、腹ごしらえをすませ少くとも七時には出払ってしまう。この調査時点での釜ヶ崎木賃宿五〇軒一四、〇九八人の宿泊とあり、一軒平均八二人となる。三畳一間が最高四〇銭、最低二〇銭で、もちろん食事はないので附近には飲食店が集まってくる。夕刻になると『おでん屋・大福屋・芋屋・ドラヤキ屋・ウドン屋・一膳飯屋』等の屋台は、一日の働きを終えた日稼人夫達の一大修羅場となる。さて今宮・釜ヶ崎のドン底生活者としての代表は『電光社裏長屋の住人』であろう。これは本来、飛田遊廓の北側に在った電光社構寸製造工場の職人長屋であったが、工場移転に伴って二二〇戸一八〇〇人の大多数が転退したが、行先の無い者二〇〇人程が住みついたものである。全くひどい荒れ方で、周囲の土地が高くなった為に、水はけが悪く溜り水の上に、あたかも琵琶湖の浮御堂の如く建っている。その空部屋の多くは残留住民が勝手に羽目板・床板をはがし、薪にしたり売ったりするので、外部より見ると鳥籠のような姿になっている。同年盛夏の釜ヶ崎を再現するために『郷土趣味大阪人』よりその一部を引用する。即ち、日暮刻の風一つ無い蒸し暑い細民街・食民街、物を煮る匂いが息づまる様に鼻

に迫る辻角。駄菓子屋の店先には、今が売れ刻の忙しさに、主婦らしいのが垢染んだ白の半襦袢に紐めた緋の腰巻の上にかけた、縞目も定かならぬ前垂でもって脂ぎった額の汗をふきふき、精いっぱい愛嬌笑いやらお世辞をいう。台湾坊主の土工らしい法被姿が、二本・三本とラムネの栓を抜いて立続けに飲んでいる。又鮮人の土工らしい半ズボンが、駄菓子硝子蓋を開けるとブーンと蠅が声をあげる中から、黒い指先につまみ上げる鉛パン三〜四個、瞬く間に平げる。その横では、ゆで豆を手につかみ上げて喰う大道芸人の娘、その後から手を差しのべ、むし芋の大小を比べて手にする者、銭を払うもの……。木賃宿のムットする三畳間に、顔色の蒼ざめたいかにも栄養不足の中年女、日給三〇銭で工場通いに疲れた髪は薄と乱れ、ダラリと胸に下った乳房の辺を、汗が浮き上っては流れる。もう夜もふけて一一時を過ぎた頃、稲荷裏の藪のあちこちに薙を敷いて、垢臭い男女が三々五々一団となって喃々私語し、聞くに堪えぬ卑限な談話に笑いさざめき、果ては疲れてそのまま、喪家の狗よろしくごろりと丸くなって、銀河きらめく下、夜露をしっとりと浴びて一夜の夢を結んでいる。以上原文のままであるが、まさに貧民窟の体臭が感じられる一文である。一方大阪市は貧民・細民を『第一種・第二種』と分類区別し、第一種は全く孤

独の者、又は扶養義務者の無い者と規定している。第二種細民とは、家賃七円以下、月収二五円以下と定めているのはユニークである。

## 五、貧民の質草

一三年大阪府知事は中川望、市長は関一。大戦後の恐慌の中で国民の生活は苦しく、特に工場労働者、都市下層貧民、小作農民の争議が相繼いで起っている。五月以降は地方銀行の取り付け、休業が続きその経済不安は少しも除かれはしなかった。それは大正デモクラシーの終りを意味し、やがて始まるファシズムへとその席を譲ろうとする時期でもあった。一五年九月発行の今宮町志に依ると、三年の釜ヶ崎は四軒一、〇四九世帯であり、この限りに於いては大正年間に木賃宿数は余り変化していない。従って貧民人口も増加していないと言えよう。一四年の大阪市第二次市域拡張により今宮村が編入され、この地区には入船町と名付けられ昭和を迎える。ここで問題なのは所謂『ヤマ・トビタ』と釜ヶ崎の関連である。両者は現在でこそ地域的に連絡し、機能的にも関連を持つようになつたが、元來は別個の地域として成立している。即ちここは木賃宿街の東方に位置し、同じく今宮村の一部もなしていたが、江戸時代

は別個であり、明治初期に入つて貧民が漸次

住みついてゆく。周辺はまだ野原で若干の田畑が残り、ここが發展しはじめたのは明治二八年頃、現在の東田町に従業員五〇人以上を抱える燐寸工場が建設されてからである。その為『ヤマ・トビタ』辺には、多くの労働者向け長屋住宅が出来、加えて市営の簡易食堂、共同宿泊所その他の公共施設も開設されてくる。こうしてこの地区は、先ず下層の工場労働者街として出発したが、しかし大正七年遊廓が開設されるに及んで、地域の性格に新たな要素が加わるわけである。さて貧民・細民の質草については八濱徳三郎『下層社会研究』（大正一〇年刊）が詳しいのでここに引用する。即ち『細民窟ニ接近スル質屋ハ、一口平均一四円位で本綿物・鍋釜・大工道具・洋傘等ノ質草少ナカラズ。中ニハ一口平均五〇銭位ノ所モアリテ、細民ノ顧客ラシキヲ觀ル。従来コノ細民窟界限ノ質草ハ車夫・土方人夫・職工・屑屋・露天商人等ヲ顧客トシテ、印紳天・股引・ボロ・雨傘・下駄・鍋釜・飯桶ノ類ヲ多く預ツテイタ』とある。大正後半期に入るとこの種質草はやや下火になつてくる。これに伴つて所謂『オドリ・上げ下げ・通用物』と称して朝、寝具を入れて衣服を出し、夕刻衣服を入れて寝具を出すというような毎日若干の利息を支払つて、朝夕入替をする者も無くなつてくる。一〇銭前後の

質草と云へば、小切、何種、下駄、便

管・手拭・金屑等で、此等はいちいち台帳に記入する事を避けて、土間辺に預り置いて朝夕の需要に依っていた。貧民・細民専門質屋に於ける利息は、衣類二五銭までは月一銭、四〇銭までは月一銭五厘、五〇銭までは月三銭、一〇円までは月二銭五厘、寝具の利息は各々一銭づつ高い。質草の種類又は金高によつて、利息は一定せず即ち大質の多い質屋は、一般に期限も長く質草も大きい、利息の所得は比較的少い。けれども、小質の多い質屋は期間が短く、金高も低いが利潤は比較的多い。次に我が国における公益質屋の歴史は大正元年一〇月の創設にかかる宮崎県南那珂郡細田村の村営金庫にさかのぼるが、大阪市に於ては同一三年一二月、大阪市民館（後の北市民館）に開設し、これを天六質屋と称した。同年内務省社会局第二部調査によると、同年中の全国私営質舗数一七、八五二店。大阪府下の質舗数一、五三七（市部九〇〇、郡部六三七）であり、入質金額二、三八七、四〇〇円、出質金額一八、四一六、二九八円、流質金額二、一七六、三九〇円であり、質舗数及共の利用状況においても大阪は全国第一位である。

## 六、昭和へのかけ橋

大正二五年大阪府知事の中川望、市長関一は

引續きその要請があつて、大正末期より昭和

大阪府社会部長は山口正、北市民館長は志賀志那人という名コンビである。明治四五年、昭和四四年、その中であつて大正は僅かに一五年間であり、明治・昭和の三分の一に過ぎない。短い橋、いかにもかけ橋らしい。小さい島と島を結ぶ長い橋よりも、大きな陸地を左右にへだてる河に架つた短い橋の方が、実際の効果は大きい。実際大正時代は短かつたが、時代の屈折期を背負うという、良かれ悪しかれ重い役目を背負い、大変な重責を果たした事も事実である。ともあれ明治から昭和へのかけ橋としての『大正』は激動の一五年、暴騰・暴落の一五年でもあつた。さてこの大正末期の『徳風学校』に関して、本年創刊の雑誌、『大阪』に次の一文がある。即ち「今官政と広田神社の間のドブ河に架けられた広田橋の際に、型ばかりの門があつて徳風小学校と看板が懸つている。足一

歩、門内に入ると、吉原の道に似た建物を直景に赤煉瓦張りの狭い運動場では、子供達が芋の子を洗うような賑いで……」とある。本年は特に船頭小唄、俗に枯れすきか未曾有の大流行となり、街にはモボ・モガが断髪で現われ、アップパップが流行した。さて大正末期の失業者群には、量・質ともに近代的名が見られ、失業の概念も変化してくる。つまり個人的な欠陥から失業者になるのではなく、社会的欠陥から失業におち入るわけである。しかも一般の失業者の他にもっと多数の『不完全雇用者』を追加しなければならぬ。此等の労働者はその生産性と賃金が異常に低い状態に置かれていた。やがて一二月二五日大正天皇が崩御され、直に皇太子裕仁親王が踐祚を行い、年号が『昭和』と改元された。即ち昭和元年は僅か六日間、二年目を迎える。色色な意味で呪われた大正の人々は暴騰・暴落の危険な橋を渡り切つた。そして

社会不安、慢性的不況、思想的不安定の増した身で、次の世代にのみり込んで行く。最後に大正一五年七月、関西線の車中から見た釜ヶ崎の風景を描いて見よう。即ち汽車が天王寺駅を出てしばらくすると、南の空の下に展開する世界、市街の中央部より追われて外郊移住を余儀なくされた人々の夢殿が営まれている。裏の広っぱや屋根には、市内で拾い集めてきた金目になりそうなものを塗り別けたのか、堆積されたり、日干されている。汽車が浪速区と西成区の境界を走って釜ヶ崎の北側に入ると、木賃宿の棟は大きいのが、地下足袋を枕元に置き、汗と油でヒヤリとするせんべいブトンにくるまって、夢破れがちな夜毎をおくる雑魚寝階級の人々、直射日光を受けたことのない黒光りの畳の上で、死骸のように昼寝している赤ん坊……陰惨な姿が思われる。

(華頂短期大学社会福祉学科助教授)

## 市政と文化を考える

# 大阪人

月刊・250円

創刊五十年の歴史を誇る、わが町を愛する市民の雑誌

財団法人 大阪都市協会

〒530 大阪市北区西扇町17  
TEL. 313-2016(代)

振替口座 大阪18858番



昭和49年の三角公園付近の通り

### 第一次釜ヶ崎集團暴

力事件（昭和三十六年八月一日・八日）から、はや十八年が過ぎた。

この間筆者は、あらゆる機会を通じ、その後の釜ヶ崎報告と考察をこころみて来た。特に昭和四十八年には、二十年間にわたる釜ヶ崎事件史年表を作成、発表した。この中で言える事は政府・大阪府・大阪市等各種関係機関における対策内容が、労働者側の変質について行けなくなった事である。

特に昭和四十七年五月以来、今日に至るまでの騒動は、かつての『わいらかて人間やで!!』という内容から、政党政治中心へと変質して来ている。今昔考最終編は大府警本部・西成署等最新のデーターを使用し、釜ヶ

崎を多角的に考察し、今後の展望へと進んでみたい。

### 一、地区の概要

釜ヶ崎は西成区の東北端に位置し、東四条一・二・三丁目、東入船町、西入船町、海道町、甲岸町、東萩町、今池町、東田町、山王町一・二・三丁目の十三町で形成され、面積〇・六平方キロで西成区全域の約八・四％を占める。この地区は国鉄環状線・南海電鉄・地下鉄・阪堺線・関西線・天下茶屋線・平野線や国道尼ヶ崎平野線、新紀州街道などの主要幹線道路が交差する。即ち交通至便の土地で、南大阪の歓楽街といわれる新世界・飛田に隣接し、アベノ・動物園・美術館・天王寺公園も近い。更に社会的な性格上、やや異質な山王・萩之茶屋の二つの地区より成っている。特に釜ヶ崎銀座を中心に下ヤと称せられる簡易宿泊所（木質宿・安宿的な素泊り旅館）が集中し飲食店・立呑屋・古物商・質屋・パチンコ・露店商・ホルモン屋・屋台等が軒をつらねる。更にその内部は次の如き小地域より構成されている。(一)東・西入船町・東田町を中心とするドヤ及び簡易アパート街。(二)東萩町の職安を中心とする街。(三)山王町一・三丁目の長屋及間貸家地帯。(四)山王町四丁目の飛田歓楽街。(五)萩之茶屋・飛田本通・今池本通・市場通・山王東通りなどの商

店街。第(一)の所謂ドヤ街は戦前・木賃宿の伝統を継ぐもので、今日その規模は戦前をはるかに凌ぎ、住民の大部分は立ん坊・アンコ・水商売関係者であり、人口流動が激しく、生活も不安定で所謂社会病理現象のデパートと言われる街。第(二)の職安地帯は、主として職安に登録して就労する失対労働者の街で、住民の年令構成は高く、消費生活水準はドヤ街より低い、安定度は高い。簡易アパート・日払アパート・問貸家等に入居し、一応落ちついた生活をしている。第(三)は戦災にあつていない為、昔からの長屋・問貸屋が多く、下層労働者の住宅街となつてゐる。しかし生活程度はドヤ街・職安地区より高く住民の安定度(性)は強い。第四の飛田地区は、旧赤線廃止により料理屋、旅館に転向しているが、やはりセット売春等旧赤線時代の性格が色濃く残つてゐる。又この飛田地区は大阪府下で最も暴力・売春事犯の多い所で、地区内に拠点を持つ暴力団、売春関係者が多く居住している。第五の商店街については、東萩商店街などの一部を除けば、整備された一般の商店街である。

反社会的集団が介在し易いとも考えられる。

## 二、地区の住民

地区内人口は住民登録・未登録を含めて約四万五千人で、大阪市の平均一平方キロにつき一万五千人と比べ、その過密さがわかる。この内一万八千〜二万人が職人を含む日雇労働者(アンコ)と推定される。ただし地区内人口に関しては関係官庁で多少数字が異なる場合がある。しかしこの異う事が釜ヶ崎の特色であるとも言えよう。又暴力団、ゲレン隊等の反社会的集団の構成員が約二千五百〜三千人とされている。此等地区内居住者をその生類別に分類してみると。(一)ドヤ・アパート・公営住宅・長屋等に止宿し、あいりん労働公共職業安定所・西成労働福祉センター・手配師等を通じて就労する日雇労働者群。(二)金があれば泊るが、ほとんど公園、空地等をねぐらにする労働意欲のない人間(通称くすぶり)や浮浪者群。(三)ドヤ・アパートに住み売春・盗品故売・常習窃盗・賭博その他反社会的行為を反覆している暴力団、ゲレン隊、不良労働者(ユスリ・タカリ)、悪質手配師等を含む反社会的分子。(四)アパートに住み地区内・新世界・南のバー・アルサロ・飲屋・料理屋等に勤めるホステス、仲居、パーテン等。(五)簡易宿泊所・アパート・下宿屋・旅館・飲食店・遊技場・質屋・古物商等の経営

者、家族及びその従業員等。此等の内、日雇労働者群はその移動(流動)が激しく大体六カ月を周期に三分の一が変わり、季節にも関連してゐる。

昭和四十四年頃の二万人をピークに、以下次第に減少し昭和五十三年は一万五千人前後である。所謂未登録人口が多いため正確な数字の把握は困難だが、大阪社会学研究会調査による年令構成は二〇〜四九歳までが総人口の五六%で、東京山谷地区より低い。ちなみに釜ヶ崎地区外の聖天下町では、二〇〜四九歳までの人口は四七%である。一五歳未満の人口は、聖天下町二三%に対し釜ヶ崎地区は一八%と低い。

## 三、労働者の生活

主として日雇労働者を対象とする宿泊施設の実態を見ると、簡易宿泊所一九四、一般アパート二四七、日払アパート三六、旅館三二である。(昭和五三年五月西成警察署調査)この内簡易宿泊所は数年前よりの新築築ブームが一段落し、現在一九四軒中四八軒が鉄筋中層化し、内エレベーター設備二七軒、冷房設備一九軒で外装は極めてデラックス化し、一般ホテルとかわらない。しかし防火設備・非常階段・通風採光等又衛生面から内部構造を検討すれば多くの問題点がある。最近保健所、消防局を初め関係機関の協力かつ適切な指導



と、大阪府簡易宿環境衛生同業組合の向きの受入姿勢により、施設の改善整備は徐々に進行している。更に一層の改善を行うためにも組合未加入者(五九軒)を一日も速く説得加入さす事である。なお釜ヶ崎地区外の簡易宿泊所は、西成区三二軒、七二〇人、浪速区六軒、五七〇人、阿倍野区九軒、六五〇人である。日払いアパートは世帯持労働者にとっては一応固定した居宅となっているが、一カ月一万五千円の家賃は日本住宅公団2DK(建設後一五年)のそれを上まわっている。高家賃とは知りつつもその生活基盤が日稼ぎであり、しかもアプレが不定期にやって来る為、みすみす高い日払いアパートに入る事になる。ドヤの構造は畳一畳の個室が大部分であり、その上畳サイズが可なり小型で一般に言われる大きき順で行くと京間↓江戸間↓団地サイズ↓ドヤサイズの順で狭くなる。形式としては小間式・ベッド式・両者併用・大部屋であり、かつて主流を占めた大部屋(追い込み)は現在一軒である。宿泊費は昭和三年で三〇〇五〇円、三五年一〇〇一五〇円、四五年二〇〇一三五〇円、五三年四〇〇一八〇〇円、冷房付個室は一、五〇〇一、〇〇〇円で、腕の良い専職人・大工達が利用している。地区の日雇労働者は今も昔も、その食生活の殆んどを外食に頼り、慰安も地区内のパチンコ、立呑屋に集中し大変な繁盛である。五三

年五月西成警察署調査によると古物商二六九、金属クズ商九、金属クズ行商八〇、質屋一九、マジシャン屋二三、パチンコ店一一、移動遊戯店六、カフェー五、小カフェー九、料理屋一、小料理屋八〇、酒類販売業三二、立呑屋一二二、移動飲食店二〇、喫茶店四三、食堂一八五、お好み焼屋四七、ホルモン屋二六、すし屋一九、映画館三、ゲームコーナー四である。昭和三年八月の夕食(大メシ)四〇円、玉子焼・ノリ・漬物・汁で六〇円、バックダン(四合八〇円)は一八〇円であり、うどん二〇円、カレーライス四〇円、焼酎一合二〇円であった。それが五三年七月では大メシ一五〇円、汁八〇円、オカズ一皿平均二〇〇円、日本酒一合二五〇円である。次に大阪市立大学釜ヶ崎研究会調査による労働者の「楽しみ」について、楽しみ無し二三%、アルコール一八%、ドヤでぼんやりしている時一六・七%、バクチ一三%とあり、地区内に低料金の健全娯楽設備の無い事が痛感される。又困った時の相談については、労働福祉センター二八・四%、特になし二七・五%、親類二・五%、友人一〇%、防犯コーナー八%と出ている。以上簡易宿泊所を中心にして宿者の生活状態を述べたが、このドヤは一人一畳位の合宿で自炊可能な旅人専門の旅館があったのが、出稼ぎ労働者の一時的旅館として、又都市生活に於て転落したその日暮

しの世帯持労働者の実質的な本拠(住所)として、アパート・間貸しと同じ役割を果してきた。戦後の住宅難、地方からの流入者の増加は、ドヤの居任的、住所的機能を一層強力にする。更にドヤ本来の目的である夜間の寝所以外に昼間の一時利用の場として、又犯罪者、刑余者、売春婦、暴力団等の隠れ家、たむろする場としての利用も増加している。この為歪んだパーソナリティは、此の地区に長期滞在するにつれ、多くは一層助長されていくのが実情である。立ち喰い・歩き喰い・排尿・吐痰あたりが汚され、路で寝ていても、人々は無関心である。

しかも生活そのものが天気・季節に左右され易く、誠に不安定であり、家族・友人・地域社会との連携は薄い。日雇労働者達は常に追いつめられた孤独な現況下において、妙に虚勢を張り、利己的の生活に走りがちであり、生活上への意欲と手がかりを失い、釜ヶ崎での生活に染り、停滞し、沈滞して行くわけである。

#### 四、就労の形態

釜ヶ崎地区に於る日雇仕事は、特に土木関係及び飯場労働者の仕事が年々減少してゆく傾向にある。原因としてまず考えられるのは、おくれればせながら中小建設会社の合理化、機械化が進んだ事である。更に最近の

農村、漁村の生活が一層厳しくなり、必然的に出稼ぎ労働者を増加させている。彼等出稼ぎ労働者は現場で黙々と下積み作業に従事し、自発的に早出・残業・休日勤務を行い、特に飯場労働者に比べて真面目であることから、次第に飯場労働者が敬遠されはじめた。加うるに大手建設会社の現場監督クラスが、会社の要請で自分の出身府県で労働者を集めるようになっていく。この結果徐々にではあるが、釜ヶ崎の労働需給事情に変化が現われ始めている。さて釜ヶ崎地区全体の就労(業)状況を見るに自営・常勤・日雇・失対その他に大別出来る。その構成比は大体、自営一・二割、常勤二割、日雇四割、失対その他二割と考えられる。当地区での自営業とは旅館・貸間業・飲食業・商業その他であるが、大半はメシ屋・ウドン屋・軽飲食店・古物商・露店商・行商・ヨセヤ等である。中には大工・左官・石工・塗装工・自動車運転手等常勤又は日雇労働に容易に転換し易いものも見られる。大規模なものでは例外的に簡易宿泊所の経営者もいるが、大部分の経営者は西成区以外に居住し、実際の経営は雇用人(帳場さん)にまかせているのが実状である。常勤に関しては詳細な調査が無いが比較的多いのは、臨時工・社外工・水商売関係(ボーイ・パーテン・ホスト・板前・女給・仲居・ホステス等)で事務員・外交員・常用

運転手も居るが、数は極めて少ない。主流を占めるのは日雇労働で、その就労経路で分類すれば職安ルート・労働センター・縁故・親方・手配師ルートに大別出来る。無職・失業その他というのは窃盗・故買・売春婦・ボン引き・ノミ屋・プロパチンカー・ダフ屋・予想屋・博徒・テキヤ・グリーン隊等の所謂反社会的グループであり、釜ヶ崎地区を見る場合、無視出来ない存在である。この様に地区内就業者は一般に就労形態が不明確で、就労日数も天候、季節に左右され易く収入も日稼形式で一定しない。民間事業関係、失対事業関係、港湾労働関係であり、りん労働公共職業安定所に登録された労働者二、九五四人、大阪港労働公共職業安定所に登録された労働者九二六人、ただしこの内三八〇人が釜ヶ崎の労働者である。あいりん労働公共職業安定所は昭和四五年四月に発足し、あいりん地区内に位置し、交通は国鉄環状線、南海本線、高野線の各新今宮駅、地下鉄御堂筋、堺筋線の動物園前の各駅に囲まれた総合愛隣センターの三・四階にある。一年間を通じ毎朝五時にセンター寄場の一六〇メートルのシャッターが開くの待って、当日求人マイクロボラス・乗用車・トラック等一三〇一五〇台がつけかけ、元気のよい求人連絡員の呼び声がひびく。朝七時半頃までに、こうして四千七千人の日雇労働者が働きに出かけてゆく。

#### 賛助会員にご入金ください

▽大阪春秋は、大阪の歴史、大阪の文化、大阪の産業など、私たち大阪人にかかわるすべてのことがらを眺めていきたいと考えています。古き良きものに照明をあてて、新しいものの根を深く掘りさげながら、衰退久しい大阪の文化に活力を与え、命を吹き込んでみようという、ささやかな庶民の運動です。

▽右の趣旨に、少しでも多くの方に賛同いただき、本誌の発行にお力添え願いたいと考えます。

▽本誌は一冊七〇〇円(送料一六〇円)です。季刊ですので年間四冊発行します。

▽賛助会費は、一年(四冊分)三、〇〇〇円、永久賛助会費は二〇、〇〇〇円です。

▽賛助会員、永久賛助会員には、送本の外、本誌企画の催物のご案内などをいたします。

▽周知のように、現在の大阪文化についての世評は、すべて賛賞たるものであります。

しかし、大阪には、点や個としての文化が散在し、それを愛する人やサークルは、たくさん潜在しているはずで、本誌は、そうした点や個の文化の一つの文化として浮揚させていきたいと念じています。

送金先 大阪春秋社の振替口座は

大阪三〇九一七八番です。

大 阪 春 秋 社

次に就労経路であるが、あいりん地区の稼働労働者数を二万人と推計して考えてみる。西成労働福祉センター七、五〇〇人、直行労働者七、〇〇〇人、大阪港労働公共職業安定所九六二人、あいりん職安二、〇〇〇人、職人グループ一、〇〇〇人、ユスリ・タカリグループ一〇〇〇人となる。この内職人グループは直行組に比べ就労先は不定であるが賃金は高い。所謂職人氣質の集団でむしろ賃金、労働条件より気分仕事をし、職人としての誇りを持っている。直行とは日雇労働者よりは精神的安定は強い。つまり一応雨でも一定の就労先が決っており、本人が現場に行けば仕事はある。しかし身分はやはり日々雇用されるものである。

ユスリ・タカリは労働者とは言えないが、条件の良い仕事があれば就労し、ない時はユスリ・タカリを行っている。例えばカストログループ、北海の熊グループ、通天閣グループ等がある。

## 五、児童の現況

所謂スラムに於る児童、生徒の不就学、長期欠席の問題及び青少年非行化の問題も従来からよく取り上げられ、それが貧困及び親の欠損と高い相関を示す事は、ほぼ一般に認識される所である。又児童福祉の立場から不就学児あるいは貧困児童の教育問題を取り上げ

た例は多い。就学前児童数を昭和四〇年国勢調査で見ると、愛隣の〇〇六歳乳幼児二、〇六九人であり、その後の推定で約二、六〇〇人とされた。四五年四月西成署調査では、〇六歳は二、四〇三人で、四月二〇日夜簡易宿泊所・日払アパート・一般アパートに止宿した〇〇六歳児は七二〇人(男三七五、女三四五)と報告されている。この数に対して当地区の公立保育所は山王保育所(定員九〇)、東田保育所(六〇)、今池生活館保育所(三〇)、愛隣会館保育所(三〇)があり、入所児の欠損家庭は二二%である。大阪市内でも当地区は、浪速区恵美地区と共に未就学児、不就学児、長欠児が最も多い。三六年前の数字は、正確な資料が無いが少くとも一五〇人は存在しており、その理由としては(一)共稼ぎ家庭、欠損家庭の傾向が強い。(二)経済的基盤の弱さが、教育に対する親の無関心・不熱心をまねく。(三)怠学が長欠に連なり、転居の多いこの地区の特色。(四)住民登録・学籍のない、更には出生届が無い。(五)不就学・長欠を意にとめない地域環境性。以上五つの理由以外に過密住宅、保護者の職業、複雑な家族関係が互いからみ合っている。分布から見ると東萩地区(三角公園周辺)を中心とした簡易アパート街三五%、ついで甲岸町、東入船町東部、西入船町、東三条町の順となる。こうした中で子供達への指導は昭和三四年頃か

ら、元校長、神西先生を中心に学生ボランティアの協力で、不在家庭の児童を中心に集め細々ながら行われていた。三六年四月大阪府青少年補導センター・西成署共同調査結果、地区内不就学児を二〇〇人としている。その後第一次釜ヶ崎集団暴力事件が発生、当時の中井大阪市長、教育委員会等の努力があつて同年一月九日と翌年一月二日に市教委主催のクリスマス会、新年会が不就学児を対象に行われた。この二度の会で約九〇人の児童が参加し、その後家庭訪問を繰り返して、就学をすすめ内約五〇人が入学願を提出している。こうした経過の後、三七年二月一日西成警察署前広場に「市立萩之茶屋小学校・今宮中学校」の分校として「あいりん学園」が開校された。次に地区内の少年非行の実態についてであるが、その原因を端的に言えば、地区の環境と保護者の監護能力だといつてもよい。特に愛隣地区は、母子家庭より父子家庭の多いのが特色であろう。父親は肉体労働者がほとんどで、従つて昼間は留守、夜は深酒で早く寝る等親子の会話が無く、放任状態である。結果肉親の愛情に飢え、精神的、情緒的に不安定になり、一寸した動機で非行化する危険性を持っている。

彼等の非行防止と激活動として、西成署防犯コーナー及び婦人警察官が中心となり、困窮家庭・欠損家庭を訪問し、生活指導や不

就学、長欠児等の発見補導に努めている。その他入学児童、卒業生への学用品、記念品の贈呈あるいはクリスマス・ケーキ等の配分も行っている。

## 六、分析と展望

以上多角的に地区の現状を見たが紙数の関係上、地区の治安は別の機会にゆずる。結果あいりん地区が単に貧困階層の吹きだまりとしてのスラム地域でない事が判明し、全体社会の矛盾を集中的に表現している『底辺労働者の街(ドヤ街)』として性格づけられる。しかも愛隣地区自体は労働の場ではなく、消費の場でありその為労働者に対する衣食住その他様々なサービス業が、地域社会で重要な機能を果している。愛隣地区の問題は、ひとりこの地区だけの問題ではなく、広く大都市さらには社会全体の動向と結びついており、従ってそこに生ずる諸問題もまた社会的・経済的不均衡や、ひずみの地域的表現にほかならない。戦後我が国の経済は神武景気・岩戸景気・いざなぎ景気をへて目ざましい成長発展をとげ、そのGNPは二〇〇兆円ともいわれる。国民所得・生活水準の向上・雇用の拡大をもたらしたはしたが、反面大都市と地方都市との間に於る諸種の格差を拡大し、労働力需要の増大と相まって、都市への急激な人口集中、即ち過密と過疎をもたらした。

経済の成長は建設業・運輸業の労働力需要を増大させたが、これら産業に於てはその前近代性・特殊性から作業は間歇的で、なお日雇労働に依存する分野が他産業に比べて多い。一方出稼労働者・刑余者等の都市の下降的転職者については、その労働能力・作業習熟の容易さ、手軽に現金収入を得られる事などから不安定・危険な就労条件下であっても、日雇仕事に就労することを希望する。彼等が得る収入を大ざっぱに見ても五二年度中、約二〇億円である。たしかに愛隣地区は事件のたびに報道される暴力・麻薬・売春等、社会的に好ましくない状況も残念ながら一部には残っているが、それはこの地区の大勢では決してない。愛隣地区は本質的には一般と交らない労働者の街であり、集中そのものが諸悪の根源でない以上、問題はその人口集中自体を防止し、あるいはこれを分散させるのではなく、集中に対応し得る受入れ体制を如何に整えて、地区の特質を適確に把握し、地区がはたしている大阪の労働市場としての機能を如何に正しく発揮させるかという事であろう。よしんばこれを強制的に分散せしめるとしても、現在愛隣地区で行われている職・住の提供構造に代り得るものが用意されなければ、労働者の生活を破壊するか、更に悪化した状態で場所を変えただけの類似地区を再現せしめる事になる。御堂筋に林立する高層ビ

ル、大阪をめぐる高速道路に投資される程に、それを建設する日雇労働者には投資が行われず、ビルの近代化ほどには日雇労働者の労働条件・賃金・労働環境が近代化されない事が問題であり、その落差の大きいことが、地区の社会的緊張を促進させる要因となつてい愛隣地区に冷房付き、エレベーター付鉄筋ドヤが出現し一級酒、ビールが売られても、その精神的風土に荒廃の面が見られ、為に居住する正常な人々をも同化させていく傾向も見られる。なにはともあれ今後ますます貴重になる臨時筋肉労働者の供給源としての愛隣地区の特質を確認した上で、一般地区並に住宅・医療・社会保険・健全娯楽・労働福祉・社会福祉等の施策を充実させねばならない。

それには総合的な社会開発の一環として、ドヤ街再開発を進め、地区住民の福祉向上とあわせて、円滑な経済発展の条件整備を行うものでなければならぬ。

(華頂短期大学社会福祉学科 助教授)

